

『今昔物語集』における文体対立語 —巻12と巻27の語彙比較による—

田中 牧郎 (国立国語研究所言語資源研究系)[†]

The Synonyms Belonging to Opposing Styles in *Konjaku-Monogatari-shu*: Lexical Comparison of Volume 12 and 27

TANAKA Makiro (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

1. はじめに

平安時代後期まで(11世紀ごろまで)は和文の文章と漢文訓読文の文章は大きく離れていて、文体¹による語彙の違いは大きなものだった。平安時代末期(12世紀ごろ)には和漢混淆文が成立し、それまでは一つの文章の中で使われることのなかった語彙が、一つのところに流れ込み、一緒に使われるようになる。

和漢混淆文の中で、和の語彙と漢の語彙とがどのように共存しているかを明らかにすることは、語彙史上の重要な研究課題であり、これまで、西田(1978)、佐藤(1984)、峰岸(1986)、関(1993)、藤井(2003)、舩城(2011)などで研究されてきた。ところが、その多くは、和語か漢語か、和文語か漢文訓読語かなど、語彙の出自を整理することが中心で、それらがどのような体系をなして共存しているかは明確にされていなかった。

それを明確化する方法として、和漢混淆文における和文的な文章と漢文訓読文的な文章とを比較することが考えられる。その第一の試みとして、和文寄りの文体で書かれている『宇治拾遺物語』と、漢文訓読文よりの文体で書かれている『今昔物語集』の同文説話をパラレルコーパスにして語の対応を網羅的に調べる方法を提案した(田中・山元 2014)。本発表では、その第二の試みとして、『今昔物語集』における和文の巻と漢文訓読文の巻の語彙を比較する方法を提案し、その方法で見えてくる語の対立について考える。

2. 『今昔物語集』の語彙調査

『今昔物語集』(以下、『今昔』と略称)は、12世紀前半に書かれた、日本語史上のはじめての本格的和漢混淆文の説話集である。おおまかには、前半の巻は漢文訓読文、後半の巻は和文で書かれている。国立国語研究所のプロジェクトでは、『日本語歴史コーパス』に組み込むために、『今昔』のコーパス化を進めている²。現在は試作段階であるが、巻12と

[†] mtanaka@ninjal.ac.jp

¹ 本稿の「文体」の定義は、「表現の媒体(音声・文字)、ジャンル、目的・意図、場面・状況などによって、言語が異なった姿を呈する現象。また、そうした観点から見た時の言語の姿」(山口 1993, p.10)により、特に、文章の種類の違いに端的に現れる言語の姿を「文体」と呼ぶ。

² 本文は、小学館の「新編日本古典文学全集」の『今昔物語集 1~4』(馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注)により、コーパス構築のために小学館から国立国語研究所に提供された電子テキストを利用している。新編全集の『今昔』は、巻1~10の天竺震旦部は収録しておらず、巻11~31の本朝部のみを収録しており、コーパス化の対象もこの範囲になる。

巻 27 については先行してコーパス化を行っており、自動形態素解析を施したデータに目視で修正を行ってデータを整えた³。表 1 は、異なり語数と延べ語数、図 1 は、その語種構成比率（異なり語数）を示したものである。自立語だけを対象とし、固有名詞を除外して集計した。これらの図表には、『今昔』巻 7⁴と、平安和文の『大和物語』と『和泉式部日記』を合わせたもの⁵のデータも表示した。

表 1 各資料の語彙量

資料	異なり語数	延べ語数
今昔巻 7	1,861	12,590
今昔巻 12	2,426	17,859
今昔巻 27	1,837	14,294
大和・和泉	2,415	17,839

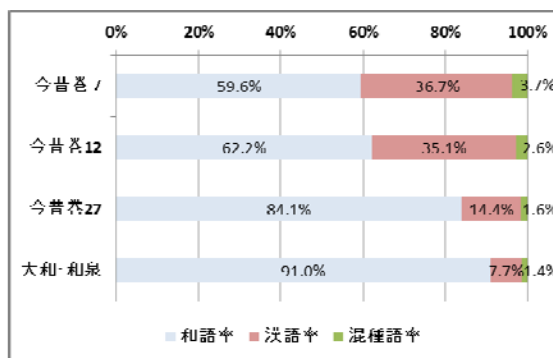


図 1 各資料の語種構成比率（異なり語数）

図 1 によると、『今昔』の巻 12 と巻 27 との間で大きな落差がある。巻 7 は純漢文を依拠資料とする漢文訓読文の巻、巻 12 は和化漢文を依拠資料とする漢文訓読文の巻であるが、そこにはほとんど差がない。巻 27 と平安和文（『大和』『和泉』）の間には差があるが、巻 12 と巻 27 の差に比べると小さい。このように、和漢混淆文である『今昔』における、巻 12（漢文訓読文）と巻 27（和文）の語彙に大きな差があることから、この 2 つの巻の語彙を比較することで、文体の違いによる語彙の違いを知ることができると予想される。

3. 巻 12 と巻 27 の特徴語の抽出

『今昔』の巻 12 と巻 27 について、一方の巻によく使われ、他方の巻にあまり使われない特徴語を抽出する。抽出の手順は次の通りである。まず、巻 12、巻 27 それぞれにおいて、各語の頻度と、巻全体の延べ語数を用いて、各語の使用率を計算し、10,000 語あたりに何件使われるかを数値に表した。

$$\text{使用率} = (\text{頻度} / \text{延べ語数}) \times 10,000$$

次に、上記で算出した巻 12 使用率と巻 27 使用率とを比較した比率を算出した。表 2 は、一定頻度以上の語彙について、50 音順に冒頭の 10 語の上記の数値を一覧にしたものである。表 2 の「1.相」、「3.会ふ」、「4.合ふ」は、巻 12 比率、巻 27 比率ともに 0.4 から 0.6 の間の数値を示しており、巻 12 や巻 27 のいずれかに偏って使用されているわけでない。これに対して、「5.障泥」は巻 12 の比率が 0.8 を、また、「10.上がる」は巻 27 の比率が 0.92 を、それぞれ示しており、巻 12 および巻 27 それぞれに、特徴的な語と見てよいだろう。本稿では、この比率が 0.8 以上のものを、その巻の特徴語と扱うことにした。その結果、巻 12

3 語の認定基準は、小木曾・小椋・須永（2012）が、中古和文を対象として定めた、短単位規程に従うが、『今昔』に適用するにあたって一部変更したところがある。

4 『今昔』巻 7 の本文には、国文学研究資料館の日本古典文学本文データベース（底本は日本古典文学大系・岩波書店）の電子テキストを用いた。

5 『大和物語』『和泉式部日記』のデータは、『日本語歴史コーパス 平安時代編』による。この 2 作品を選んだのは、延べ語数の合計がちょうど『今昔』1 巻分に相当し、比較しやすいからである。

の特徴語が 303 語、巻 27 の特徴語が 243 語得られた。

表 2 『今昔』巻 12・巻 27 の使用率の比率 (50 音順冒頭 10 語)

No	読み	語彙素	品詞	巻 12 頻度	巻 27 頻度	頻度 計	巻 12 使用率	巻 27 使用率	使用率 計	巻 12 比率	巻 27 比率
1	アイ	相	接辞	4	3	7	2.24	2.1	4.34	0.52	0.48
2	アイダ	間	名詞	123	34	157	68.87	23.79	92.66	0.74	0.26
3	アウ	会ふ	動詞	21	19	40	11.76	13.29	25.05	0.47	0.53
4	アウ	合ふ	動詞	13	9	22	7.28	6.3	13.58	0.54	0.46
5	アオリ	障泥	名詞	5	1	6	2.8	0.7	3.5	0.8	0.2
6	アカイ	赤し	形容詞	2	5	7	1.12	3.5	4.62	0.24	0.76
7	アカイ	明し	形容詞	2	6	8	1.12	4.2	5.32	0.21	0.79
8	アカガネ	銅	名詞	5	3	8	2.8	2.1	4.9	0.57	0.43
9	アカツキ	暁	名詞	2	5	7	1.12	3.5	4.62	0.24	0.76
10	アガル	上がる	動詞	1	9	10	0.56	6.3	6.86	0.08	0.92

4. 内容の違いによる特徴語

巻 12 の特徴語、巻 27 の特徴語は、それぞれ、説話の内容の違いに基づく特徴語が多くを占める。例えば「阿闍梨」という語は、巻 12 に 44 件用いられており、巻 27 には 1 件も用いられていない。巻 12 のそれらは、6 つの説話で、飯室の阿闍梨 (第 22 話) ら 6 人の人物を指して用いられているものである。「阿闍梨」とは、平安時代の日本では、儀式を執り行うなど一定の役割を担う、真言宗や天台宗の僧侶の職名として用いられることが一般的であった (『日本国語大辞典 第 2 版』小学館)。『今昔』で、「阿闍梨」が巻 12 に多く、巻 27 に皆無であるのは、それぞれの巻に収録された説話が、このような人物を多く登場させているか否かという、説話の内容の違いに基づく現象である。同じく「尼」が、巻 12 に 24 件あって、巻 27 に皆無であるのも、尼が登場する説話が一定数あるか全く無いかの違いによるものである。巻 12 と巻 27 の説話を読んで検討した結果、巻 12 特徴語 303 語中 231 語が、内容の違いに基づく特徴語だと考えられた。同じような手順で、巻 27 特徴語を一語一語検討していくと、「兄」「弟」など、243 語中 149 語が内容の違いに基づく特徴語だと考えられた。

それでは、それ以外の巻 12 特徴語 72 語、巻 27 特徴語 94 語は、どのようなものだろうか。

5. 文体の違いによる特徴語

5.1 慣用句が特徴語となるもの

巻 12 にまとまった件数があり、巻 27 にはそれがほとんどない語の中には、特定の慣用句として用いられている例が多くを占めるものがある。このような場合は、その語自体が特徴的だということよりも、その慣用句が特徴的だと見るべきだろう。

例えば、「思ひ」は、巻 12 に 7 件、巻 27 に 1 件あり、巻 12 特徴語だが、そのうち、「思

ひの如く」という慣用句が、巻12で4件、巻27で1件を占め、この慣用句が巻12に特徴的だと見ることができる。「思ひの如く」が漢文訓読文である巻12に特徴的であるのは、「如思」という漢語の訓読表現だからだろう。このような特徴語は、ほかに、「^{かうべ}首」（「首を挙ぐ」は「挙首」の訓読表現）、「掌」（「掌を合はす」は「合掌」の訓読表現）、「涙」（「涙を流す」は「流涙」の訓読表現）など、全部で10語ある。

巻27特徴語のうち慣用句が特徴語になるのは、「太る」（「頭の毛太る」）1語だけである。この慣用句は話し言葉の中で使われていたものだろう。

これらは、慣用句が、漢文の訓読によってできたものか、日本語の話し言葉の中でできたものかによって、文体の違いによる特徴語になっていたものだと見ることができる。

5.2 他方の巻に対立語があるもの

文体の違いによる特徴語には、慣用句のほかに、他方の巻にほぼ同義の対立語がある場合がある。

例えば、動詞「与ふ」は、巻12には20件あるのに対して、巻27では2件にとどまり、巻12に特徴的である。各巻から1例ずつを挙げれば、次の通りである。

正則此ノ牛ヲ聖人ニ与ヘツ。(巻12-24)

男懷ヨリ玉ヲ取出シテ女ニ与ヘツ。(巻27-40)

第1例は、正則が牛を聖人に授与する例、第2例は、男が玉を女に授与する例であるが、これらの例のような、誰かが何かを誰かに授与するという内容は、巻12にも巻27にもよく見られるものであり、「与ふ」が、巻12の特徴語となる理由を、説話が扱う内容の違いに求めることはできない。

それでは、「与ふ」は、なぜ巻12に多く、巻27には少ないのだろうか。その理由は、次のような例を見ることで推測することができる。

(遠助は) 此ノ箱ヲバ女ニ取セムトテ (巻27-21)

この例も、誰かが何かを誰かに授与することを言っているものであるが、「与ふ」ではなく、「取らす」を用いている。巻27には、これと同じ意味で「取らす」を使う箇所が12件あり、「与ふ」よりもずっと多い。誰かが何かを誰かに授与する意味を表すのに、巻12では「与ふ」を用いることが一般的であり、巻27では「取らす」を使うことが一般的なのである。

同じ意味を表すのに、巻12でよく使われる語と巻27でよく使われる語が違うのは、漢文訓読文と和文との文体の違いによるのではないだろうか。ほぼ同じ意味の語で、他方の文体でよく使われる語のことを、「文体対立語」あるいは単に「対立語」と呼ぶことにする。

6. 文体対立語

6.1 対立語のリスト

巻12の特徴語のうち、巻27に対立語を持つものについて、各巻の頻度とともに一覧にすると、表3の通りである。同じく、巻27の特徴語のうち、巻12に対立語を持つものについて一覧にすると、表4の通りである。

6.2 対立の多層性

表3で35対、表4で28対が得られているが、そのうち13対が双方向から得られたもの（「双方向」の列に「＊」の印があるもの）であるので、異なりで50対の対立が見出され

表3 『今昔』 巻12 特徴語のうち巻27 に対立語があるもの

巻12 特徴語	語種	品詞	巻12 頻度	巻27 頻度	巻27 の対立語	語種	品詞	巻12 頻度	巻27 頻度	双方向
疑ひ〔有らず、有らじ、無し〕	和	名詞	10	0	必ず	和	副詞	29	23	
女子（をんなご）	和	名詞	7	0	女の童	和	句	0	23	
奇異	漢	名詞	19	2	あさまし	和	形容詞・形状詞	1	31	*
悟り〔有り〕	和	名詞	10	1	賢し	和	形容詞・形状詞	1	9	*
大臣（だいじん）	漢	名詞	15	3	大臣（おとど）	和	名詞	0	18	*
為（ため）	和	名詞	54	8	とて	和	句	16	45	
端正	漢	名詞	6	0	うるはし	和	形容詞・形状詞	0	3	
並び〔に〕	和	名詞	16	0	など	和	助詞	6	95	
女人（にょにん）	漢	名詞	16	0	女（をんな）	和	名詞	17	111	
父母（ぶも）	漢	名詞	30	4	親	和	名詞	1	4	*
諸々	和	名詞	25	1	あまた	和	副詞	0	18	*
汝	和	代名詞	44	6	其（そこ）	和	代名詞	6	25	*
					己（おのれ）	和	代名詞	2	19	
与ふ	和	動詞	20	2	取らす	和	句	0	12	
哀れむ	和	動詞	10	0	哀れ	和	形容詞・形状詞	10	14	
至る	和	動詞	27	3	つく	和	動詞	19	44	
生まる	和	動詞	20	0	生む	和	動詞	1	4	*
終はる	和	動詞	26	1	果つ	和	動詞	2	10	*
悲しむ	和	動詞	35	2	悲し	和	形容詞・形状詞	9	2	
化（け）す	混	動詞	5	0	成る	和	動詞	53	74	
叫ぶ	和	動詞	11	0	声を挙ぐ	和	句	11	4	
従ふ	和	動詞	22	2	つく	和	動詞	19	44	
住す	混	動詞	14	1	住む	和	動詞	10	43	*
生ず	混	動詞	8	0	生む	和	動詞	4	1	
悩む	和	動詞	6	0	煩ふ	和	動詞	7	4	
開（ひら）く	和	動詞	22	4	開（あ）く	和	動詞	1	19	*
経（ふ）	和	動詞	26	4	過ぐ	和	動詞	12	30	
在（ましま）す	和	動詞	29	1	おはす	和	動詞	1	38	*
用ゐる	和	動詞	6	0	使ふ	和	動詞	7	5	
養ふ	和	動詞	6	1	傳（かしづ）く	和	動詞	1	2	
喜ぶ	和	動詞	32	4	嬉し	和	形容詞・形状詞	2	11	*
明らか	和	形容詞・形状詞	5	0	明（あか）し	和	形容詞・形状詞	2	6	
速やか	和	形容詞・形状詞	17	2	疾（と）し	和	形容詞・形状詞	3	11	*
具（つぶ）さ	和	形容詞・形状詞	7	1	詳し	和	形容詞・形状詞	0	3	
つゆ	和	副詞	8	0	聊か	和	副詞	3	3	
御（ご）	漢	接辞	7	0	御（み）	和	接辞	12	5	

表4 『今昔』 巻27 特徴語のうち巻12に対立語があるもの

巻27 特徴語	語種	品詞	巻12 頻度	巻27 頻度	巻12の対立語	語種	品詞	巻12 頻度	巻27 頻度	双 方向
あまた	和	名詞	1	18	多く	和	名詞	14	5	*
					諸々	和	名詞	25	1	
大臣 (おとど)	和	名詞	0	18	大臣 (だいじん)	漢	名詞	15	3	*
親	和	名詞	1	4	父母 (ぶも)	漢	名詞	30	4	*
顔	和	名詞	1	15	面 (おもて)	和	名詞	3	3	
俣	和	名詞	0	16	如し	和	助動詞	93	11	
					時に	和	句	75	57	
様 (やう)	漢	名詞	12	62	如し	和	助動詞	93	11	
渡り	和	名詞	0	9	辺 (ほとり)	和	名詞	15	16	
己 (おのれ)	和	代名詞	2	19	汝	和	代名詞	44	6	*
開 (あ) く	和	動詞	1	19	開 (ひら) く	和	動詞	22	4	*
生む	和	動詞	1	4	生まる	和	動詞	20	9	*
御 (おは) す	和	動詞	1	38	在 (まし) す	和	動詞	29	1	*
斯かり	和	動詞	1	23	然り	和	動詞	184	107	
住む	和	動詞	10	43	住す	混	動詞	14	1	*
果つ	和	動詞	2	10	終わる	和	動詞	26	1	*
あさまし	和	形容詞・形状詞	1	31	奇異	漢	名詞	19	2	*
怪し	和	形容詞・形状詞	1	23	怪しむ	和	動詞	28	12	
嬉し	和	形容詞・形状詞	2	11	喜ぶ	和	動詞	32	4	*
恐ろし	和	形容詞・形状詞	10	52	恐る	和	動詞	8	13	
賢し	和	形容詞・形状詞	1	9	悟り有り	和	句	5	1	*
斯様 (かやう)	漢	形容詞・形状詞	0	8	如此 (かくのご と) し	和	句	35	1	
疾 (と) し	和	形容詞・形状詞	3	11	速やか	和	形容詞・形状詞	17	2	*
いと	和	副詞	6	33	極めて	和	副詞	31	29	
え	和	副詞	0	27	能ふ	和	動詞	4	0	
然 (さ)	和	副詞	4	25	然 (しか)	和	副詞	3	3	
暫し	和	副詞	1	9	暫く	和	副詞	12	10	
臈 (やが) て	和	副詞	0	6	即ち	和	副詞	20	6	
あな	和	副詞	0	8	ああ	和	副詞	1	0	
人 (たり)	和	接辞	1	10	人 (にん)	漢	接辞	9	7	

たことになる。双方向から得られた対は、文体的対立が非常に明瞭なもの、一方向のみから得られた対は、対立がさほど明瞭でないものであり、対立のありようは多層的である。その対立と層のありようを図示すると、図2のようになる。

図のaには、表3で「双方向」に「*」が付いている13語の対立が該当する。例えば「奇異」は上の「漢文訓読文に特徴的に見られる語彙の層」に位置付き、下の「和文に特徴的な語彙の層」に位置付く「あさまし」に対立している。図のa'には、表4で「双方向」に

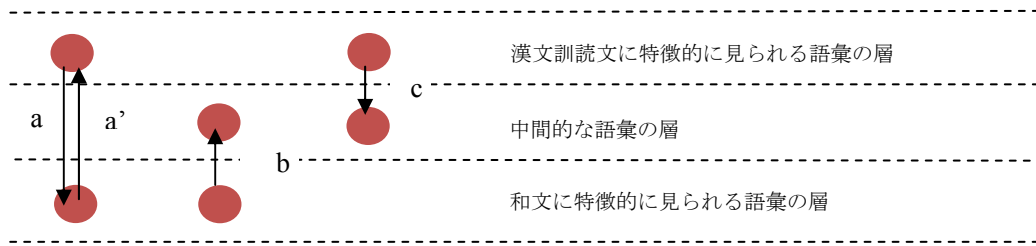


図2 語の対立と語彙の層

「*」が付いている13語が該当し、例えば、下の層にある「あさまし」から上の層にある「奇異」との対立が見える。「奇異」「あさまし」の対は、上層からも下層からも対立が見える、非常に鮮明な対立を持っている。

図のbには、表4で「双方向」に「*」が付いていない15対が該当する。例えば「顔」は、下層の「和文に特徴的に見られる語彙の層」に位置付き、「中間的な層」にある「面（おもて）」と対立している。「中間的な層」の語は、文体的な特徴語ではなく無色な語であるため、aの場合ほど、対立関係が鮮明ではない。図のcには、表3で「双方向」に「*」が付いていない22語が該当する。例えば、「疑ひ〔有らず、有らじ、無し〕」は、上層の「漢文訓読文に特徴的に見られる語彙の層」に位置付き、「中間的な語彙の層」にある「必ず」と対立している。bの場合と同じく、文体的に無色な「必ず」からは対立が見えにく、やはりaの場合ほどには対立が鮮明でない。

このような文体的な対立関係にある語は、従来、「漢文訓読語」と「和文語」の対立というように言われてきたが（築島 1963, 1969）、そのような単純な対立にとどまるものではなく、連続的な層を背景とした対立だと見るべきであろう。

6.3 対立の種類

先に挙げた50対の対立を見ると、語種・品詞の観点から、次の3つの類型に分けられる。各類型における挙例では、漢の側の層（中間的な層を含む）の語／和の側の層（中間的な層を含む）の語、という形式であげる

（1）異語種間の対立 10対

奇異／あさまし、大臣（だいじん）／大臣（おとど）、父母（ぶも）／親、住す／住む、端正（たんじやう）／うるはし、女人／女（をんな）、化す／成る、生ず／生む、御（ご）／御（み）、人（にん）／人（たり）

漢の層と和の層の語の対立ということを考えると、漢語と和語の対立ということがまず思い浮かぶが、それは上の10対（20%）にとどまり、実際は多くない。

（2）異品詞間の対立 18対⁶

疑ひ〔有らず、有らじ、無し〕〔名詞〕／必ず〔副詞〕、女子（をんなご）〔名詞〕／女の童〔句〕、奇異〔名詞〕／あさまし〔形容詞〕、悟り〔有り〕〔名詞〕／賢し〔形容詞〕、為（ため）〔名詞〕／とて〔句〕、端正〔名詞〕／うるはし〔形容詞〕、並び〔に〕〔名詞〕／など〔助詞〕、諸々〔名詞〕／あまた〔副詞〕、与ふ〔動詞〕／取らす〔句〕、哀れむ〔動詞〕／哀れ〔形容詞〕、悲しむ〔動詞〕／悲し〔形容詞〕、叫ぶ〔動詞〕／声を挙ぐ〔句〕、喜ぶ〔動詞〕／嬉し〔形容詞〕、如し〔助動詞〕・時に〔句〕／俚〔名詞〕、如し〔助動詞〕／様〔やう〕〔名詞〕、怪しむ〔動詞〕／怪し〔形容詞〕、恐る〔動詞〕

⁶ 異語種間で異品詞のものもここに計上したため、（1）と重複して分類したものが2対ある。

／恐ろし [形容詞]、此様 [かやう] [形状詞] ／如此 [かくのごとし] [句]

様々な品詞間で対立があるが、漢の側の層には名詞と動詞が多く、和の側の層には形容詞が多い。特に、感情動詞と感情形容詞の対が多いことが目を引く。

(3) 同語種・同品詞の対立 24 対 (48%)

諸々／あまた [名詞]、汝／其 (そこ)・己 (おのれ) [代名詞]、至る／着く [動詞]、生まる／生む [動詞]、終はる／果つ [動詞]、従ふ／付く [動詞]、悩む／煩ふ [動詞]、開 (ひら)く／開 (あ)く [動詞]、経 (ふ)／過ぐ [動詞]、在 (ましま)す／御 (おは)す [動詞]、用る／使ふ [動詞]、養ふ／傳 (かしづ)く [動詞]、明らか／明し [形容詞・形状詞]、速やか／疾 (と)し [形容詞・形状詞]、具 (つぶ)さ／詳し [形容詞・形状詞]、つゆ／聊か [副詞]、面 (おもて)／顔 [名詞]、辺 (ほとり)／渡り [名詞]、極めて／いいと [副詞]、然 (しか)／然 (さ) [副詞]、暫く／暫し [副詞]、即ち／臈 (やが)て [副詞]、ああ／あな [感動詞]

多様な品詞があるが、動詞と副詞が目立っており、この 2 つの品詞が対立関係を構成しやすいことが分かる。

(1)(2)(3) の類型ごとに、対立の実際を、個別に研究していくことが必要になる。田中 (2000) は (1) の事例、田中 (1998) は (2) の事例を取り上げた研究である。

7. おわりに

内容の違いによる対立語にも、慣用句があるものでも対立語があるものでもない語が、巻 12 特徴語で 27 語、巻 27 特徴語で 65 語残る。それが、どのような語であるかは、現段階では不明である。これについて研究していくことも課題である。

謝辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」(プロジェクトリーダー: 近藤泰弘)、及び、日本学術振興会科学研究費基盤研究 (B)「和漢の両系統を統合する平安・鎌倉時代語コーパス構築のための語彙論的研究」(24320086、研究代表者: 田中牧郎) による成果の一部です。

文献

- 小木曾智信・小椋秀樹・須永哲矢 (2012)「中古和文 UniDic 短単位規程集」(科研費報告書)
 佐藤武義 (1984)『今昔物語集の語彙と語法』(明治書院)
 関一雄 (1993)『平安時代和文語の研究』(笠間書院)
 田中牧郎 (1998)「今昔物語集の情意述語文と文体」(『国語学』194)
 田中牧郎 (2000)「今昔物語集における和漢の対語の意味対立—〈奇異〉〈微妙〉を例として—」(遠藤好英編『語から文章へ』)
 田中牧郎・山元啓史 (2014)『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説話における語の対応—語の文体的価値の記述—」(『日本語の研究』10-1)
 築島裕 (1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会)
 築島裕 (1969)『平安時代語新論』(東京大学出版会)
 西田直敏 (1978)『平家物語の文体論的研究』(明治書院)
 藤井俊博 (2003)『今昔物語集の表現形成』(和泉書院)
 船城俊太郎 (2011)『院政時代文章様式史論考』(勉誠出版)
 峰岸明 (1986)『平安時代古記録の国語学的研究』(東京大学出版会)
 山口佳紀 (1993)『古代日本文体史論考』(有精堂)